

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：34509

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00822

研究課題名(和文) 英語教育に生かす言語景観研究：誤用分析と異文化コミュニケーションの観点から

研究課題名(英文) Study on Linguistic Landscapes for Improving English Language Education in Japan: Analysis of Non-Native English Expressions in terms of Language Contact and Intercultural Communication

研究代表者

森下 美和 (Morishita, Miwa)

神戸学院大学・グローバル・コミュニケーション学部・教授

研究者番号：90512286

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：研究開始当初は、COVID-19の影響によりフィールドワークの実施が難しかったが、研究代表者の地元である神戸や世界的観光都市である京都に焦点を当てた小規模調査を無理のない範囲で進めた。2021年度後半には所属大学の在外研究制度を利用し、オーストラリアで約3か月間のフィールドワークを行い、20名以上を対象にインタビューを実施した。その後、台湾国立清華大学のコンピュータサイエンス学部に訪問学者として約3か月間滞在し、これまでに収集した言語景観のデータを教材として活用する方法を検討すると同時に、誤りの事例を含めた言語コーパスを作成し、英文作成支援ツールの共同開発を新たにスタートさせることとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでは一般的に、教室/実験室内で英語学習者の産出した文字/音声が英語の誤用分析の対象であり、実社会の中で、主にインバウンド観光客を対象に用意された英語表記/音声にどのような誤用があるかについては、英語教育の分野では必ずしも重要なデータとはなっていなかった。本研究における言語景観調査によって、実社会で実際に使用されている誤用例を数多く収集することが可能となり、研究代表者の担当する授業では、すでに誤りの事例を含めた簡単な教材をパワーポイントで作成して使用している。今後は、英文作成支援ツールの共同開発において、当該データを言語コーパスの作成に活用していく。

研究成果の概要(英文)：Although travel restrictions related to COVID-19 initially made it difficult to conduct fieldwork, the principal investigator proceeded with a small-scale survey focusing on Kobe, where her university is located, and Kyoto, a city with numerous world-class tourist attractions.

In the latter half of FY2021, PI conducted fieldwork in Australia for about three months, interviewing more than 20 people. After that, she visited and stayed at the Department of Computer Science of National Tsing Hua University in Taiwan for about 3 months as a visiting scholar to study how to utilize the language landscape data collected so far as teaching materials, and at the same time, to start a new joint development of English writing support tools by creating a language corpus including examples of errors.

研究分野：心理言語学、英語教育学

キーワード：言語景観 誤用分析 異文化コミュニケーション 外国語表記 英語教育 観光 インバウンド観光客

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

国際的なイベントを前にした政府のインバウンド観光客誘致の方針が功を奏し、地方都市を含めた日本全国で海外からの観光客が激増している。それに伴い、街頭、公共施設、店舗などに見られる言語表記や言語音声など、街中の「言語景観」は急速に変化している。言語景観研究はこれまで、主に地理学、社会学、社会言語学などの分野において進められてきたが、多言語化する現代社会においては、外国語教育の分野における言語景観研究の成果の活用も喫緊の課題である。

欧米の言語景観研究は、言語政策との関連でマイノリティ言語や多言語教育について議論しているものが中心であるが (Cenoz et al, 2015; Gorter et al, 2014 など) そこから得られたデータを外国語教育に活用する例も現れてきている (Malinowski, 2014 など)。日本で言語景観研究を外国語教育に活用する例は、留学生を対象とする日本語教育の分野でいくつか見られるものの (磯野, 2013; 西郡ほか, 2016 など) 研究代表者の知る限り、英語教育の分野ではまだ限られている (Roland, 2012 など)。日本においても街中の多言語表記 / 音声が増加する中、英語教育の分野における言語景観研究は、今後ますます重要性を増すと考えられる。

インバウンド観光客や在留外国人を想定したと思われる掲示やアナウンスなどは、その目的を果たしているのだろうか。綴りの間違い、明らかな文法の間違い、慣用から外れた用法など、英語として間違っただけが見られるほか、内容的に作成者の意図とずれていたり、誤解を招きかねないケースも多い。たとえば、インバウンド観光客が、個室トイレで数多くのボタンの中から「流す」ボタンを見つけることは意外と難しいのではないだろうか。どうすれば分かりやすい案内になるかは、情報デザインの分野における課題でもあるが、その言語表記については、異文化コミュニケーションの観点から検討すべき課題でもあり、英語に誤用や誤解を招く表現が混入する原因は、言語学や英語教育学の分野における課題でもある。

2. 研究の目的

実際に言語景観調査を行ってみると、英語として意味が通じない表現が散見される。しかし、どこが間違っているのか、どのように表現すれば良いかは一筋縄ではいかず、一般的な日本人の英語に対する知識や理解に深く根差している。単に使用されている語彙や表現が正しいかどうかを議論するだけではなく、言語学 / 英語教育学の観点から、そのような誤解 / 誤認識を丁寧に解きほぐしていくことが重要である。

日本人が間違いやすい英語の特徴が表れている一例として、カタカナ語の影響で、「ホットサンド」がそのまま hot sand (直訳すれば「熱い砂」と表記されて平然とメニューに並んでいたりするが、ここでは、toasted/grilled sandwich とすべきであろう。これまでは一般的に、教室 / 実験室内で英語学習者の産出した文字 / 音声は英語の誤用分析の対象であり、実社会の中で、主にインバウンド観光客を対象に用意された英語表記 / 音声にどのような誤用があるかについては、英語教育の分野では必ずしも重要なデータとはなっていなかった。言語景観調査によって、実社会で実際に使用されている誤用例を数多く収集することが可能となる。本研究では、日本の言語景観における英語使用についての現状を把握し、言語景観調査のプロセスおよびデータ分析の結果を英語教育に生かすことを目的とする。

3. 研究の方法

1) 神戸の言語景観データの収集

日本の中でも神戸は、歴史的背景から西欧化 / 国際化による言語景観の多言語化が進んでいる都市のひとつである。中心的な繁華街である三宮・元町周辺、在留外国人の多い北野異人館街 (森下ほか, 2019)、中華街など、特色のあるエリアを中心に、英語表記 / 音声データの収集を行う。Backhaus (2005) を参考に、言語景観 / 音声環境を「単一言語」対「多言語」、「公的表示」(道路標識、地名表示、官庁の標識など) 対「私的表示」(店名表示、広告看板など) といった観点から分類したうえで、英語表記 / 音声をメモし、同時に撮影 / 録音も行う。「観光 / ホスピタリティ」をテーマとする研究代表者のゼミの学生 (英語専攻) にも、アクティブ・ラーニングの一環としてデータ収集に協力してもらう。

2) 収集データにもとづくアンケートおよびインタビュー調査

上記の収集データをまとめ、インバウンド観光客へのアンケートおよび在留外国人へのインタビューを行う。インバウンド観光客に対しては、日本の言語景観において、言語的、意味的、情報的環境とのインタラクションをどのように経験しているかについてのアンケートを行う。平松ほか (2019) を参考に、実際の英語表記 / 音声の事例を提示し、それが何を意味するか、語彙や表現は分かりやすいか、分かりやすくなければどうあるべきかと思うかなどの質問項目を用意する。在留外国人の多いエリアの言語景観については、外国人居住者への半構造化インタビューを行う。あらかじめ用意された質問項目 (彼らのコミュニティで使用されているのは、世界共通語としての英語か、特定の居住者の母語か、あるいはやさしい日本語か、またその言語景観は彼らにとって分かりやすいものであるかなど) に回答しつつ、それらにまつわる情報について自由に話してもらう。これらのデータにもとづき、外国人にとって分かりにくい事例について、そ

の原因を言語学 / 認知科学の観点から分析する。

3) 言語景観データの再調査および英語学習用教材の開発

同じエリアで複数回にわたって調査を行うと、日本語のみの表記に外国語が併記されるようになっている、表記される言語の種類が増えている、間違っただけの表記 / 音声や直訳的な表現が（おそらくは利用者からのフィードバックによって）修正されているなどの変化が見られることがある。そこで、2020 年度に言語景観調査を行ったエリアで再調査を行い、以前のデータと比較してみる。また、データの分析結果をもとに英語学習用教材を開発し、研究代表者が担当する「観光学入門」「通訳・翻訳の方法」などの授業の中で実際に使用し、インターネット上でも公開する。サンフランシスコの日本人街で日本語の言語景観を調査しているなどの報告もあるため (Malinowski, 2014)、海外で同様の研究を行っている教育者とコンタクトを取り、language exchange も兼ねた共同授業を実施することも視野に入れている。これらの研究成果は、国内の学会で発表することで広く発信するが、最終年度には、研究代表者が企画 / 運営に関わっている学会 / 研究会におけるシンポジウムを開催する。

本研究により、日本の言語景観における英語使用についての現状が明らかとなる。また、そこから得られたデータをもとに、外国人にとって分かりにくいと考えられる日本人特有の英語の誤用について言語学的観点から分析する。さらに、分析結果をもとに、実社会で実際に使用されている誤用例を数多く含む英語学習用教材を開発することが可能となる。このように、本研究では、異文化コミュニケーションも視野に入れた英語教育のありかたを提案できる。

4. 研究成果

2020 年度は、COVID-19 の影響により、本研究の主要な課題であるフィールドワークの実施が難しかったが、研究代表者の地元である神戸に焦点を当てた小規模調査やグーグルストリートビューを活用したオンライン調査などを中心に研究を進めた。言語景観調査に興味を持つ国内在住およびオーストラリア留学中のゼミ生にも、現地調査に関して協力を求めた。日本における日本語表記が常に正しいわけではないことと同様に、学生たちが英語圏での留学の際に撮りためた写真の中にも英語表記に問題がある例が見られたり、フィールドワークの代わりにグーグルストリートビューを使って調査すると、過去の画像データも見ることにより経年変化を確認できるなど、新たな発見も多かった。

2021 年度は、COVID-19 対策を徹底しつつ、神戸に加え、国内の観光都市での調査を徐々に再開した。また、所属大学の在外研究制度を利用し、オーストラリアのビクトリア州（メルボルン）で約 3 か月間のフィールドワークを行った。世界でいち早く国境を開放し、再び外国人観光客を受け入れることとなったオーストラリアにおいて、COVID-19 の影響を含めた言語景観調査および現地で 20 名以上を対象にインタビューを実施できたことは、本研究に大きな価値をもたらす経験となった。英語圏においても英語表記に問題のある例に加え、日本語表記が好んで使用されている例、アルファベット表記であるが日本語ないし日本語由来と思われる表現が使用されている例、中国語・ベトナム語など特定の言語の使用者に向けたと思われる例など、多くのデータを収集することができた。これらは英語圏に住む多種多様な言語・文化を持つ人々の言語使用についての貴重なデータであり、日本人英語学習者の英語使用における誤りとの比較・検討が可能なケースも多い。

2022 年度前半は、所属大学の在外研究制度で新竹（台湾）の国立清華大学に滞在する予定であったが、COVID-19 の影響により、訪問学者としてのビザの交付に時間がかかったため、検疫期間も含めて約 3 か月間の滞在となった。コンピュータサイエンス学部の Professor Jason Chang の研究室で、これまでに収集した言語景観のデータを教材として活用する方法を検討すると同時に、誤りの事例を含めた言語コーパスを作成し、英文作成支援ツールの共同開発を新たにスタートさせることとなった。台湾滞在中には、台北・高雄・台南などの主要都市で言語景観のデータを収集したが、中国語と英語および / または日本語の併記の例では、必ずしも英語または日本語が正しいとは限らないため、（研究代表者が未習得である）中国語から意味を推測するほうが正しく理解できる場合があるという新しい発見もあった。本研究課題の研究期間中に在外研究の機会に恵まれたことで、当初の計画を一部変更することになった一方で、予想していた以上の成果も上げられていると考えている。在外研究期間における国内待機中（4 月～5 月）は、無理のない範囲で国内の観光地の言語景観調査を行った。6 月にはオーストラリアを訪問し、学会発表および調査のためブリスベンとシドニーに約 3 週間滞在した。台湾滞在中（7 月～9 月）については上述した通りである。10 月以降は、COVID-19 の影響が少なくなってきたことから、国内の言語景観調査を行いつつ、海外における発表や研究交流のための出張もほぼ問題なくできるようになった。

2023 年度は、2021 年度後半から 22 年度前半にかけてオーストラリアと台湾に滞在した際に現地で収集したデータを整理・分析し、発表・投稿するための作業を進めた。また、COVID-19 の影響により当初の計画から一部変更を余儀なくされたデータ収集についても、国内外で継続的に行っている。研究代表者の担当する観光学や通訳・翻訳などの授業では、すでに誤りの事例を含めた簡単な教材をパワーポイントで作成して使用しているが、受講生が実生活で見聞きするような事例であるため、作例や古い資料からの引用とは違う影響力を持った教材となっていることを実感している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計18件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Ito, A., Hiramatsu, Y., Ueda, K., Harada, Y., Nakayama, H., Hasegawa, M., Morishita, M., Sato, M., Sasaki, A., and Chansawang, R.	4. 巻 Vol. 41
2. 論文標題 Development of tourism resources utilizing healing effects	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Affective and Pleasurable Design	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 坪田康・森下美和・原田康也・平松裕子・佐良木昌	4. 巻 vol. 122, no. 103
2. 論文標題 スキャン翻訳を通じた言語景観・言語理解（英語編）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 電子情報通信学会『信学技報』	6. 最初と最後の頁 46-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坪田康・森下美和・原田康也・伊藤篤・湯山トミ子	4. 巻 vol. 122, no. 103
2. 論文標題 スキャン翻訳を通じた言語景観・言語理解（中国語・その他編）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 電子情報通信学会『信学技報』	6. 最初と最後の頁 52-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原田康也・平松裕子・森下美和	4. 巻 -
2. 論文標題 心身のwell-beingを目指したICT 活用観光開発：静けさとやさしさと心地よさと	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本認知科学会第39回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 128-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 森下美和	4. 巻 -
2. 論文標題 台湾の意味景観調査に向けて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本認知科学会第39回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 142-144
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 原田康也・森下美和	4. 巻 vol. 122, no. 304
2. 論文標題 意味環境との交渉と外国語の自律的学習：ディクテーション・応答練習・言語景観の理解	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 電子情報通信学会『信学技報』	6. 最初と最後の頁 10-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森下美和	4. 巻 vol. 122, no. 419
2. 論文標題 インバウンド観光客の不在：京都の言語景観調査から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 電子情報通信学会『信学技報』	6. 最初と最後の頁 65-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山春佳・川上晴人・平松裕子・上田一貴・原田康也・森下美和・伊藤篤	4. 巻 vol. 121, no. 87
2. 論文標題 パワースポットめぐり支援アプリの構想について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 信学技報	6. 最初と最後の頁 30-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森下美和	4. 巻 vol. 121, no. 87
2. 論文標題 言語景観とピクトグラム	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 信学技報	6. 最初と最後の頁 38-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原田康也・佐良木昌・平松裕子・森下美和	4. 巻 -
2. 論文標題 情報環境 (言語景観・意味景観) とのインタラクション: 多層的異文化コミュニケーションの危険な曲がり角	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本認知科学会第38回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 788-794
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森下美和	4. 巻 -
2. 論文標題 神戸における外国人居住地域の言語景観	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本認知科学会第38回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 799-801
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川上晴人・中山春佳・平松裕子・伊藤篤・長谷川まどか・原田康也・上田一貴・佐々木陽・森下美和・佐藤美恵	4. 巻 vol. 121, no. 440
2. 論文標題 日光観光案内アプリのマルチメディアコンテンツの構成に関する検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 信学技報	6. 最初と最後の頁 25-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森下美和	4. 巻 vol. 121, no. 440
2. 論文標題 メルボルンの言語景観調査：コロナ時代の観光都市	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 信学技報	6. 最初と最後の頁 50-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平松裕子・森下美和・原田康也・伊藤篤・佐良木昌	4. 巻 vol. 121, no. 440
2. 論文標題 観光地日光における言語景観：継承と変容	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 信学技報	6. 最初と最後の頁 56-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森下美和	4. 巻 2021年度版
2. 論文標題 日本の言語景観における英語の誤用傾向	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 言語学習と教育言語学	6. 最初と最後の頁 77-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hiramatsu, Y., Harada, Y., Morishita, M., Ito, A., & Saraki, M.	4. 巻 1
2. 論文標題 Surveys about local traditional objects in Nikko, The World Heritage Site: Intercultural contacts and understanding other cultures	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Proceedings of 12th International Conference on Education and New Learning Technologies (Edulearn2020)	6. 最初と最後の頁 1724-1728
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森下美和	4. 巻 vol. 120, no. 427
2. 論文標題 観光都市の言語景観：神戸から海外へ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 信学技報	6. 最初と最後の頁 24-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山春佳・伊藤篤・平松裕子・原田康也・上田一貴・森下美和	4. 巻 vol. 120, no. 427
2. 論文標題 脳波を利用した観光における気付きの分析	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 信学技報	6. 最初と最後の頁 32-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 Ito, A., Hiramatsu, Y., Ueda, K., Harada, Y., Nakayama, H., Hasegawa, M., Morishita, M., Sato, M., Sasaki, A., and Chansawang, R.
2. 発表標題 Development of tourism resources utilizing healing effects
3. 学会等名 AHFE 2022 International Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Morishita, M., & Harada, Y.
2. 発表標題 Use and misuse of non-Japanese found in linguistic landscapes in Japan
3. 学会等名 9th International Conference on Intercultural Pragmatics and Communication (INPRA2020) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 坪田康・森下美和・原田康也・平松裕子・佐良木昌・伊藤篤・湯山トミ子
2. 発表標題 異文化接触場面におけるスキャン翻訳活用の可能性と限界
3. 学会等名 第190回次世代大学教育研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森下美和
2. 発表標題 台湾の文字景観：犬首焼から猫耳朵まで
3. 学会等名 日本英語教育学会・日本教育言語学会第53回年次研究集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 森下美和
2. 発表標題 言語景観を通じた異文化接触と言語教育の研究
3. 学会等名 グローバル・コミュニケーション学会第2回研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Morishita, M., Fukutome, N., & Harada, Y.
2. 発表標題 Intercultural linguistic landscapes and authenticity in international cuisine
3. 学会等名 JWLLP-32: The 32nd Joint Workshop on Linguistics and Language Processing (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Morishita, M., & Harada, Y.
2. 発表標題 Linguistic landscapes in Japan and Australia and how language learners perceive them
3. 学会等名 57th RELC International Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 森下美和
2. 発表標題 プライベートスペースの言語景観の紹介
3. 学会等名 第177回次世代大学教育研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中山春佳・川上晴人・平松裕子・原田康也・上田一貴・森下美和・伊藤篤
2. 発表標題 日光戦場ヶ原における森林浴効果
3. 学会等名 電子情報通信学会ネットワークソフトウェア研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森下美和
2. 発表標題 海外での言語景観調査に向けて
3. 学会等名 第184回次世代大学教育研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Ito, A., Hiramatsu, Y., Ueda, K., Harada, Y., Morishita, M., & Sasaki, A.
2. 発表標題 To develop a new travel experience to be relaxed in nature
3. 学会等名 ENTER 22 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森下美和
2. 発表標題 メルボルン・レポート2
3. 学会等名 日本英語教育学会・日本教育言語学会第52年次研究集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森下美和・梅田葵・岡本裕樹・上月綾香・中附もね
2. 発表標題 メルボルンの言語景観
3. 学会等名 第174回次世代大学教育研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 植野一瑳・川南莉奈・渋谷真里・辻咲菜恵・矢嶋駿也・矢田優芽夏・森下美和
2. 発表標題 外国人居留地の言語景観
3. 学会等名 第175回次世代大学教育研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森下美和
2. 発表標題 開港5都市の言語景觀：函館の巻
3. 学会等名 日本英語教育学会・日本教育言語学会第51年次研究集会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------